

1999年4月9日、昨夜NHKの国際放送で初めてリナックスのことを知った。深夜の時間帯だったので記憶はさだかではないが、ストックホルムの一学生がコンピューターをはじめ買ってソフトを自分で作ったことから始まる。とにかく、著作権なしでアマ、プロとも興味と善意の報酬なしで巨大な会社すら真似できない各国の愛好者が連一携して日々、ソフトが生き物のように成長している。やがて既成の巨大会社さへ飲み込んでしまいそうだという現実が起こっている現象である。資本の原理である経済を無視して「善意」が実っているという事実に私も全く驚いた。そうして11日の東京都知事選で石原信太郎が当選した。パリにいて東京都選なんて全く関係ないが国籍、多人種のるつぼという得体の知れない深層心理の鎖に繋がれている自分自身を発見する。青島当選にも驚いたが良い意味での石原は小説家としての文化はどうなるのだろうかという興味が湧く。確信の観がある。そういえば日本新党にも驚いたことを思い出す。確かに細川が首相になったが奇蹟はつづかなかつた。もし日本に政治的奇蹟が起これば意外と石原のもつ小説家の要素かも知れない。石原に投票し大勝させた東京都民とは一体、何者なのか。

民主主義的な投票、国民の信任を得ているものにナチスがあり、現在ではユゴウがあるが、国家間の戦争、他人種の殺害等は民主主義国家では絶対に起こらないものであろうかと正直なところ考えてしまう。大衆とは何者であり私とは一体、得体の知れない謎が深まる。それにしても投票とは多数者の同意を必要とした制度である。当然、多数が正しいとはかぎらないが、現在の学説ではこれこそが正であり、善というものは無いということが定説で人間生命の維持にはどうも邪魔になる厄介ものらしい。その点、好奇心まで含めて小説家石原の都知事は現在の日本には珍しく大統領型で若しかしたら、石原の言う通り東京都が世界をリードすることになるかもしれない。恐らく実現させるのはそう簡単なことでないが日本の奇蹟を石原に期待することは間違いであろうが期待したい願望が残るところが面白い。しかし正直、小説家がどれほどのものかがスケスケに見えるという日本では珍しい事態が出現した。このことは芸術家が何処まで政治家になれるかの試金石である。石原のもう一つの小説だと私は思っている。政治を越えた小説なんて実際にあるのか無いのかは知らないが、こういう時にこそ芸術が何かを生むかも知れない。